大衆的・組織的・全国的日ソ友好運動開始

30周年記念

ロシア革命と佐藤三千夫

『ロシア革命とシベリア出兵』補遺

新藤　東洋男

日ソ協会福岡県連合会

大衆的・組織的・全国的日ソ友好運動開始

30周年記念

ロシア革命と佐藤三千夫

『ロシア革命とシベリア出兵』補遺

新　藤　東洋男

日ソ協会福岡県連合会

佐藤　三千夫

一九二二年一二月四日ハバロフスクでとりおこなわれたヤポンスキー・コミュニスト・サトウの葬儀

宮城県登米町にある佐藤三千夫の墓と墓参した日ソ協会福岡県連の代表者

佐藤三千夫の葬儀と登米町の墓

一九二二年一一月下旬に死亡した佐藤三千夫の葬儀は、ロシアの労働者・農民、それにロシア革命をささえてたたかった朝鮮人、中国人らによってハバロフスクでとりおこなわれていた。この写真は、ロシア革命に一命をささげた佐藤三千夫の功績をたたえるのにふさわしい光景を写出している。佐藤三千夫の顔写真ともども雑誌『進め』（一九二三年六月号）よりとったものである。

「故佐藤三千夫五十回忌追悼供養塔」とある下の写真は、日ソ協会福岡県連の代表者が、一九七八年三月に墓参した時のもので、右より案内者首藤直一郎さん、山内正樹（日ソ協会福岡県連副会長）、岩倉啓裕（同県連理事）、長浜実雄（同県連事務局長）さんらの方々。

表紙写真はソヴェト政権樹立祝賀デモに参加したウラジオストークの労働者たち

『ロシア革命とシベリア出兵』補遺 ―はしがき―

一九七八年四月に「ロシア革命と干渉戦争反対六〇周年」と「日ソ協会福岡県連合会創立二〇周年」を記念して『ロシア革命とシベリア出兵』を日ソ協会福岡県連合会から刊行した。それは「ロシア革命前夜」、「第一次世界大戦とロシア革命」、「ロシア革命干渉戦争とソビエト政権」、「ロシア革命をささえた各国の民主勢力」、「ロシア革命下の日本人」と「附論」よりなり、「写真と文」によりながら一九一七年のロシア革命の達成から一九二〇年におよぶ過程を中心にすえて考察したものであった。

ロシア革命干渉戦争にのりだした諸外国のうちで日本とアメリカが最も積極的に「シベリア出兵」を断行していくが、国民の与論におされて、もはやロシア革命をおさえることの不可能さをみとどけたアメリカは、一九二〇年四月にシベリアよりの撤兵を完了し、七月にはサハリン（樺太）よりの撤兵を終えていた。しかし日本はソビエト社会主義共和国連邦が成立する一九二二年までとどまったのである。

ところが日本帝国主義の執拗な革命干渉戦争の続行と競い合うようにして、ロシア革命を支え、ともに闘いぬいたすぐれた日本の労働者があった。その人は佐藤三千夫であった。これについては、『ロシア革命とシベリア出兵』でも若干ふれたが、この「補遺」では佐藤三千夫の問題を中心にすえて、一九二〇年代の問題を論究しようと考えている。

目次

はしがき …… 1
一、ロシア革命と佐藤三千夫 …… 3
二、『市川正一公判陳述』での評価 …… 15
三、徳永直と佐藤三千夫 …… 20
四、対露非干渉・「労農ロシア」承認運動と日本の労働者・農民たち …… 24
五、シベリア出兵反対・対露非干渉・「労農ロシア」承認運動関係年表 …… 41
『補遺』へのあとがき …… 52

一、ロシア革命と佐藤三千夫

「『日本ブルジョア政府のシベリア出兵は、巨億の日本労農階級の膏血の結晶を空にし、出征無産兵士を徒に極寒に苦しめ、更に世界最初の無産階級国家を暴圧するものである』という問題が、君をして抑々共産主義革命運動に一身を捧げるの動機を与えたものだという君の純白な、何の色艶もない告白を、君の遺したノートの中から発見したからである。」

「僕は不幸にして君の臨終に居合さず、翌二十三年の雪溶けの頃、始めて赤旗の輝く君の墳墓を訪れた。」

「佐藤君！　君は淋しいだろう！　雪風吹き荒むシベリアの雪野に独り寝する君は！　僕は雪が降り始める頃も、雪が溶け出す頃も、また各国の帝国主義軍支那出兵問題を耳にする時も、更に革命運動の犠牲者を云々する時も、その度毎に君の事を心の底に想い起さずには居られない。」

「君は日本労農大衆中最初のロシア革命の為のギ（ママ）牲者であった。」「君を知る者は極めて少ない。君の両親でさえも、何の為に、斯うした末期を遂げた事かその真相を知らぬであろう。だが君の死を他人が知り、真相の意義が世に知られる時は恐らく、日本の労農大衆に依って労農ソビエト〇〇（ママ）が建設された時であろう。僕は君が知多（チタ－新

藤注）の僕等の中へフイと転げ込んで来て以来、余りに仲好であったが為に、君の年も、生れ故郷も知らなかった。君の名は佐藤進、年は時に廿三才、宮城県人であった事等も失礼ながら君のバスケットに遺したノートの中から知ったのだ。

シベリアに駐在していた日本軍は凡て帝国主義者の極東シベリア合併の目的の為に銃剣を以て強制的に送られたものであった。彼等は皆無産階級出身の兵士であった。その中に君は勇敢にも、沼を渡り、山を越え、沼水を飲み、雨水にうたれつつ、変装して彼方此方に出没して、帝国主義戦争の罪悪、労資階級闘争の意義、日本軍撤兵の必要を説いた印刷物を撒布して歩いた。斯様な危険を冒しての偉大な君の行為に対して僕達は何か記念する処の義務を感ずる。その義務の万分の一を果す物に、此の同志スターリンの著『レーニンとレーニンイズムの基礎』の邦訳の印刷物を以てこれに当てんとするものだ。」

これは「佐藤進」こと佐藤三千夫を追悼して出版した「佐藤君の記念出版」とする日本語訳『レーニン主義の基礎』に付された「三宅伊之助」なる人物の筆になる「佐藤進君を追悼する」という序文の一節であった。この「序文」には「一九二七年、メーデーの日」と記され、裏表紙にはアラビア数字で「１９２８年」と印刷されていたと佐藤三千夫について調査した徳永直『日本人サトウ』には記していた。またこれはこの印刷物は日本製ではなく、「『外国製』小冊子」とされていた。ソビエトのどこかで印刷したものであろう。なお、この印刷物は、一九二九

年二月に「ナンカツ労働組合の者」（「南葛労働組合の者」か）が佐藤三千夫の郷里宮城県の実父佐藤唯助を訪ずれて、三千夫の葬儀の写真、シベリアで書き残した三千夫のノート等とともに届けられたものであった。徳永直『日本人サトウ』によると、この『レーニン主義の基礎』なるパンフレットの表紙裏には、佐藤唯助によって

「大正十一年十一月二十七日頃死同十二月四日葬儀、昭和四年二月十一日、旧正月二日、遠藤始郎君外一名入来為知受ナリ」

と書き記され「遠藤始郎」なる名刺が貼りつけられていた。

「三宅伊之助」とはペンネームであろうが、佐藤三千夫らとともにロシア革命をささえ、日本のシベリア出兵に反対し、「シベリア出兵」で派遣されてきた日本の兵士たちにその非を訴えてたたかいつづけた、日本のすぐれた労働者の一人であり、佐藤三千夫のかけがえのない同志であったであろう。

ロシア革命をささえて闘いつづけた、日本のすぐれた労働者佐藤三千夫は、一九〇〇（明治三三）年一月二日に宮城県登米（とよま）郡登米町に生れ、登米尋常小学校から一九一三（大正二）年四月に県立佐沼中学校へ進学していた。しかし、同校四年生の一学期である一九一六（大正五）年五月に退学し、一九一八（大正七）年に私立東北中学校に編入していた。三千夫の小学校時代の友人であり、遠縁に当る伊藤政雄が徳永直に語るところによると、三千夫の「退

学」は佐沼中学校での同盟休校事件があり、そのための「退学処分」であったという。（徳永直『日本人サトウ』—平野謙ら編『戦争文学全集』第一巻毎日新聞社、昭和四七年刊三〇五頁）

いずれにしても佐藤三千夫は、私立東北中学校を一九一九（大正八）年に卒業し、一時は簿記専修学校に通うが、同年七月にウラジオストクに渡っていった。三千夫のウラジオストクへの渡航は、佐沼中学校の校長のあっせんによるものであった。この校長の弟である木村格がウラジオストクでマッチの製造・販売をしており、その木村商店への就職であった。この時期はロシアは革命反革命の渦中で、日本の「シベリア出兵宣言」を発する直前のことであった。

三千夫のおちついた木村商店はウラジオストクのペオンスカヤ街二七にあった。この商店は七〜八人を雇ってその経営をいとなんでいた日本人商店であったが、彼はここで革命反革命の抗争、「シベリア出兵」による革命干渉戦争の模様をまのあたりにみながら、一九二一（大正一〇）年八月まで働き、その後木村商店をさって同市のセメノフスカヤ街二十の森雄吉方に移っていった。この時期あたりからロシア革命をささえ、「シベリア出兵」反対の活動に入り、パルチザン部隊に参加していったであろう。徳永直『日本人サトウ』の調査によると、森雄吉方より「まもなく、第一野戦郵便局受付浦塩斯徳日本居留民会気付キタイスカヤ街十二戸田商店内と変じて、それから以降は消息が絶えてしまっている。」（前掲書三〇六頁）としている。

パルチザン部隊の一員としてロシア革命を支えて闘い続けていた渦中に、佐藤三千夫は一時帰国していた。徳永直の妻トシヲは、三千夫のふた従兄妹の関係にあった。トシヲが三千夫の

妹キヨと東京上野の御徒町の派出看護婦会で働いていた時、帰国した三千夫はトシヲとキヨをこの派出看護婦会に訪ずれていた。それは一九二二（大正一一）年春のことであった。何の目的で一時帰国したのかわからないが、トシヲたちに語るところによると「兵隊検査をうけに、登米へかえるから、ちょっとよったんだ」といい、離別のため三日目に再度彼女らを訪ずれた時には、「兵隊検査は敦賀でもうけられるから、すぐ敦賀へもどる」といいのこして再びシベリアへ旅立っていった。そしてこの年の一一月末に彼はロシア革命の犠牲者として二二才一一カ月の生涯を閉じたのである。日本共産党が結党したのはこの年の七月一五日のことであった。

一九二二年一二月四日、佐藤三千夫の葬儀は、ロシア革命をたたかったすべての人たちによって、ハバロフスクでとりおこなわれていた。さきにあげた「佐藤君の記念出版」なる『レーニン主義の基礎』の口絵には数枚の佐藤三千夫の死と葬儀の写真がかかげられており、その一つにハバロフスクの革命政府の庁舎とも思われる建物を背景にして、砲車に乗せられた三千夫の棺が多くの人たちにみまもられて出発しようとしている写真であったが、この写真の右肩には、

「赤衛軍護衛と葬式の音楽吹奏の裡に葬式は行われ、共産党員、労働組合員は全部参加した」と印刷してあったと、このパンフの写真を手にした徳永直は記していた。かかる「パンフレットの口絵の写真について、徳永直は「一つは佐藤の死顔のみえるベット」のまわりに、「共産党支部長グープマンを中心に、ダッタン人風の帽子をかぶったのや、シベリア風の耳垂れのふ

かい毛皮帽をかぶった背の低いのや、いろんな人種がむらがり立って、頭上には、ロシア文字のや、朝鮮文字みたいのや、絵模様のや、いろんな旗がひくくたれている。いま一つは「佐藤君の告別式」で、ハバロフスク労働宮の大ホール内の全景、棺を中心に円陣を描いた沢山の人人の背後に、巨大なロシア文字のプラカード、無数のいろんな旗がかざられてある。更に三つめとして、さきにのべた「砲車にのせられた佐藤の棺」の写真を説明していた。この他に「遠藤始郎」なる労働者が三千夫の父佐藤唯助のところにこのパンフレットとともにもちきたった「佐藤三千夫葬送の日」の写真についてのべていた。

「写真のうち一葉は、満目雪の広野を帯のように細くながくのびながら、葬列のいくところである。数旒の赤旗にまもられながら、花環にかざられた長方形の棺がかつがれており、百四五十人の、女性もまじった、毛皮外套や、黒いコサック帽の、ロシア人とか、中国人とか、朝鮮とか、アジア人らしい人物もまじって、うしろにつづいている。台紙の裏には『於ハバロフスク、一九二二、一二、四、同志佐藤葬送の日』と、日本文字で記してある」（徳永直前掲書二九九頁）

と記していた。

この佐藤三千夫の葬儀の模様から三千夫がいかに革命をささえたロシア人民および中国人、朝鮮人とともに、命を堵してたたかいつづけ、帝国主義諸国の「シベリア出兵」をたたかい、

こよなくおしまれながら昇天していったのかをつぶさに知ることが出来る写真であるが、彼の具体的活動の模様は、赤岐狂平「赤旗の下に眠る佐藤三千夫」（『進め』第一年五号—大正一二年六月進め社発行）によってこと細かく伝えていた。「赤岐狂平」はペンネームであり、これが誰かについては今のところ不明であるが、シベリアにおいて佐藤三千夫とともにたたかっていた人物であった。あるいは、「遠藤始郎」という人かまたはその周辺のものであったであろう。この雑誌『進め』が発行された「一九二三（大正一二）年六月」とは佐藤三千夫が死去した半年後のことであった。

「同志佐藤は××の軍国的資本主義の奴隷として苦役せられている××の無産階級と兵卒にプロレタリアの使命とインターナショナルの精神を伝える為め共産党員として、最も困難なる任務に就いた。

一九二二年六月であった。当時沿海州には雪隠詰めになった日本軍が、スパスカヤ、ニコリスク、浦塩と駐屯して逃げ腰の白軍を支持している。スパスカヤ以南の鉄道とニコリスク、ウラジオの線とで三角形になった所その凹角に凸出した山の間にアヌーチノの部落がある。そこには沿海州パルチザンの司令部と共産党支部があった。同志佐藤は数名の同志—朝鮮人、支那人、ロシア人等と共に重大な任務を帯びてアヌーチノに向った。イマン停車場からアヌーチノに行くには、険悪の山道を数日、馬車又は徒歩でゆかなければならぬ。嶺づたい谷づ

たいに行く沿道には部落らしい部落とてはない。彼等は今日小流の畔に露営の夢をむさぼり、明日は住む人もない荒家に一夜の露をしのいで七月の下旬目的地に這入った。目的地に這入った彼等は、人間業とは言われない活動を始めた。物質的窮乏は彼等をして益々奮起せしめた。九月には日本軍が撤退する風評が此の山の中にも聞えた。彼等の活動は益々猛烈になり機敏になった。

十月になると白軍が窮鼡的攻撃を始めた。白軍騎兵の数百は赤軍の虚を衝いて、アヌーチノの村に攻め寄せた。砲弾は雨霰と飛んでくる。同志佐藤は他の同志と共に銃を執って第一線に立った。

彼れは其の時の彼等の勇敢な戦闘振りと白軍騎兵の間抜け加減をいつも面白く話しては最後に『麿がネ……』と笑わせる。」

と赤岐狂平は佐藤三千夫の活動について述べた。「麿」とは歌舞伎の「高島屋の声色を得意」としていた三千夫につけたニックネームであり、三千夫自身も「麿が」と自分を呼んでいた。小学校時代の同級生であった伊藤政雄の中学当時の三千夫についての思いでの中に、「ミズォと、おらたち、ドン牛居士といったち、オイ佐藤ドン牛、とよばれると笑ったナ」とあるが、これを聞いた徳永直は「ドン牛とは三千夫が自らつけたニックネームだそうであるが、『ドン牛』が『呑牛』であるか『鈍牛』であるか、伊藤政雄も忘れてしまって、首をかしげていた」とある。「麿」はこれに通ずるものがあり、三千夫の人となりを示すひとこまであったのであ

う。「ドン牛」のことは徳永直の聞き書であった。

佐藤三千夫が重要任務をもって沿海州のパルチザン部隊の司令部と共産党支部のあったアヌーチノに着いたのであるが、その帰途の事情について、赤岐狂平は三千夫からの手紙を紹介していた。

「十二日（十月）には四五露里も歩いたら日が暮れたので途中の朝鮮人の家に厄介になり、次の日はスタラヤ、スキソエフカまで強行軍しました。随分暑かったが夕方朝鮮人の宅に着いたときは寒く体がふるへました。兎に角それまでは無事でしたが、其の翌日は一日雨降り、しかも山路ばかりを歩いたので身体が綿の様につかれた。跣足になれば足裏が痛い。靴をはいたまま歩いていると『マメ』が出来て堪え切れぬ程痛む。遂に予定通りに行かなくて濡れ鼡の体で『ヤコリエフカ』六露里手前の村で一泊濡れた衣類を干すことも出来ず、頭に熱があり、下痢がするのでテッキリ赤痢にでもなったんだと悲観した。翌十五日は痛い四肢五体をひきづって、牛の様に除行し午前十一時頃漸く『ヤコリエフカ』に着いた。」

と。そして佐藤三千夫は十月末にハバロフスクにたどりついてその任務を果していた。しかしその時はすでに立ち上ることの出来ない身体になっていた。赤岐狂平は、その模様を

「麿は此の時病を得た。病躯をもかまわず数日無理矢理に旅行を続けてハバロフスクに十月二十七八日頃に着いた。着いて旅館の一室に横たわった時には既に頭が上らなかった。哈市共産党では尊いプロレタリアの闘士の身の上を案じて陸軍病院に収容し看護と治療に努めた」

とのべ、コムニスカ（女の共産党員）らのやさしい看護の甲斐なくして息をひきとっていった
とのべていた。

この赤岐狂平の「赤旗の下に眠る佐藤三千夫」の書き出しには、

「一九二三年一月の中旬の朝であった。各労働組合の赤い会旗と第五軍団の軍旗とに護られ、轟き渡るインターナショナル歌の合唱の中に俺達の列車は静々と第一チタの停車場を浦塩に向って出発した。ペスチャンカの山には朝日が俺達の行程を祝福するが如くに輝き第二チタの市街は淡い煙につつまれている。列車がインゴダイ鉄橋を渡り第二チタの停車場を過ぎた時に俺は俺の助手であるインターナショナルッ児と朝餉の食卓についた。口のかけた鉄瓶から茶を飲みながら彼は『同志佐藤が居たらなー』と言うた。俺も建設の事業を一日も見ずして逝いた同志佐藤のことを思い出した。」

とこのように記していた。赤岐狂平は、チタを出発して六日目にハバロフスクに着き、ハバロフスクの陸軍墓地に埋葬されていた佐藤三千夫の墓に参っていた。「守備隊の兵舎につらなる丘の陸軍墓地には、美しく並んでいる葉のない白樺に囲まれて、星ーインターナショナルのマークーを頂いた無数の墓標が並んでいる。赤旗に護られ花環に飾られた墓標には『日本共産党員同志アサダ・サトウ』と刻まれてあった。」とのべていた。また、この赤岐狂平は、佐藤三千夫の遺稿の中にあった詩を紹介していた。

果しなき過去より未来へ

一杯ひろがれる暗闇を
小さき火玉のコロコロと
ころがり行く。

人々は皆
この火玉を追ひて狂乱す。

人の子を無造作に吐く暗闇は
走りつかれてかの火玉に
追ひつきかねし人々を
後から後から呑んで行く。

火の玉はコロコロところがって行く。
永遠の闇へ！

なお雑誌『進め』より二カ月も早い『赤旗』の四月号（一九二三年＝大正一二年）には、ウラジオストクよりの甲野唯の通信による「同志佐藤君の死」を報じていた。

「同志佐藤君はパルチザンを組織して白軍の夜襲にも出られた。たかだか数十名の一隊（勿論ロシア人、朝鮮人を含む）の裡の君の手腕功績は、斉しく他同志を驚かしたものである。医薬と被服に乏しいシベリアの同志諸兄の活動の困難は想像に余りあるもので、最も危険なそして最も苦しい行動は、先づ共産党員が負ふのである。……酷寒に近いシベリアの十月の夜更、単身日本軍に近づきその任務を果して帰って来られたときのその笑み、その顔、同じ日本人間の驚きの的となったのである。

ウラジオの落城がもう数日に近づいたウラジオの日本字新聞は、この宣伝の経過や内容を可成詳しく報じてゐた。

シベリアの十月下旬は、もう寒い。日一日とせまる寒気は、つひに、同志佐藤君をして悪性感冒に感染させ、病床にその体を横へるの余儀なきに至らしめた。

同僚の淋しさは一時士気にも関した。前線より送られる急報は、他の同志を留める訳には行かなかった。柔しいロシアの看護婦の手に託して一同は別をおしんで立去った。……佐藤君の病気は悪性感冒から肺炎に移り、日本の同志がハバロスクに着いた時には彼は平和の夢を結んでゐるかの様に、安らかに目を封じてゐた。日本の同志、朝鮮の同志、露西亜の同志は皆此の若き同志の死を悼み悲しんだ。……」（甲野唯「同志佐藤君の死」―『赤旗』大正一二年四月号、山辺健太郎、竹村英輔「十月革命が日本にあたえた影響」―『前衛』一九五七年一二月号による）

二、『市川正一公判陳述』における評価

『市川正一公判陳述』は一九三二年七月一〇日に日本共産党中央委員会アジ・プロ部で創立一〇周年を記念して『日本共産党闘争小史』として公刊したものであり、市川正一の不朽の名作であった。

「われわれは日本共産党員であるがゆえに、このゆえにのみ、この法廷に立たされている。多くの同志は日本共産党員であるがゆえに、また日本共産党のために活動したゆえをもってブルジョアから酷烈に追求され迫害され、逮捕され投獄せられ、そして長期の刑をうけ、あるいはブルジョアジーの白色テロのためにたおれた。私もまた日本共産党員であるがために、他の理由は一つもなく、ただそのゆえをもってのみ、この法廷に立たされている。

その日本共産党、わが日本共産党は、はたしてなにをなしてきたったであろうか。いまここに日本共産党の過去―われわれが逮捕されるまでの活動を具体的に述べてこのことをあきらかにしたいと思う。」

と日本共産党のすぐれた闘士市川正一は法廷に立たされた冒頭に述べ、「以下、日本共産党の重要な発展の時期をわけて主要な点を述べる。まず、日本共産党はいかなる時代にうまれて闘

争し成長しきったか、今日、われわれが逮捕されるまでの全時代の総括的な姿を述べようと思う。」として、「日本共産党の成立」、「党の創立からいわゆる解党決議まで」、「コミンテルの解党不承認から再建まで」、「再建大会から再組織まで」、「二七テーゼにもとづく党の再組織から第六回世界大会まで」、「コミンテルン第六回世界大会以後」について日本人民の解放をねがう日本共産党の立場を主張したのである。この勇気と確信にみちた市川正一の法廷陳述は、「暗黒裁判の法廷に立たされながら、逆に支配勢力を日本国民の進歩と解放の敵として告発し、労働者階級と国民解放の事業の勝利と共産主義の正しさを堂々と主張した」（若林進『市川正一公判陳述―一九二二～二九年の党活動について―』解説）ものであった。この公判は三・一五事件、四・一六事件の統一公判における市川正一による代表陳述であり、すべての自由の拘束のもとでこの公判をたたかった党員による獄中での準備と集団的検討をへて市川正一による代表陳述になったものであった。

『市川正一著作集』上（日本共産党中央委員会出版局、一九六二年刊）に付された「市川正一略年譜」によると市川正一が日本共産党に入党するのは、一九二三（大正一二）年一月のことであった。日本共産党の創立は一九二二年七月のことであるので、その半年後ということになる。一九二二年の一月にはモスクワで極東勤労者大会が開かれ、日本代表として片山潜と徳田球一らが参加しており、日本共産党結成の方針が討議されていた。そして七月に日本共産党が結成され、一一月にコミンテルン第四回大会が開かれ、日本共産党の創立が報告されて、日

本支部として承認されたのである。このコミンテルンの日本問題小委員会では片山潜を中心にして日本共産党綱領草案が討議されて起草されていた。また片山潜はコミンテルン執行委員に選ばれていた。

佐藤三千夫が密かに帰国したのは、この年の春のことであり、コミンテルン第四回大会が開催されていた時期には、重要な任務を帯びて、パルチザン部隊の司令部と共産党支部のあったアヌーチノからハバロフスクに帰り、ハバロフスクの陸軍病院（パルチザン病院）で闘病に全力をあげていた時期であった。佐藤三千夫のシベリアにおける活動については、この『公判陳述』では高く評価し、日本共産党成立の歴史的必然性を説いているが、市川正一が佐藤三千夫に会ってその活動事情を聞いていたという事実を証左するにたる資料は今のところ全くない。むしろ、三・一五事件、四・一六事件で公判に付された同志の誰かに佐藤三千夫があっており、その事実を市川に報告していたということの方が妥当な解釈ではなかろうか。徳永直のさきの『日本人サトウ』では、「市川正一が、佐藤進、本名三千夫と逢ったことがあるかどうか？」「以上述べられている事柄が（公判陳述のこと―新藤）、胡蝶看護婦会にキヨとトシヲをたずねてきた。東京二日間の滞在と関係があることに疑いはなかろう」（前掲書三一八～九頁）とみていた。いずれにしても、『市川正一公判陳述』においては、ロシア革命の世界史的意義、革命干渉戦争に反対してたたかった日本人民の果した役割について、また佐藤三千夫の活動について、高く評価していた。もちろん一九二三年四月の『赤旗』を市川正一はみていたことは十分に考えられる。

日本共産党が結成された当時の国内の労働運動、無産運動、社会主義運動の状況のもとで是非とも「一つの新しい力づよい指導的な中心を絶対に必要」としたためであり、「日本の労働者が日本共産党を要求し、その成立のために根本的な動力」となったのであるが、これを「促進し激成し発展させた」ものにロシア革命の勝利があったとして次のように述べていた。

「もちろんこれを促進し激成し発展させたものは、じつに国際的なプロレタリア運動の発展、ことに一九一七年ボルシェビキにひきいられたロシア・プロレタリア革命の勝利の影響であって、それはじつにはかりしることのできないほど広大なものであった。ロシア革命については、日本のブルジョアジーは世界のブルジョアジーと協力して若いソビエト・ロシアを包囲して反革命的攻撃をおこない、また新聞や雑誌や学校や、その他あらゆるところ、あらゆる手段でロシアの革命党すなわちボルシェビキに対して悪宣伝のかぎりを尽した。しかしながら、日本のプロレタリアは、このロシア革命こそ自分たちとつながるものであり、ロシア革命によって樹立された労働者農民の国、プロレタリア独裁の国こそ労働者の国家である、という階級的な同情と好感とをしめした。これが日本ブルジョア政府のソビエト・ロシアに対する反革命的干渉となり、一方シベリア出兵に対する日本プロレタリアの非常な憎悪と闘争の根源となったものである。勝利を得たロシア・プロレタリアートは日本プロレタリアートの兄弟であり、彼らにおしえられかつ鼓舞されるのだということ、すすんでは尊敬すべき階級的兄弟であることを、日本の労働者はその労働者的本能をもって知り、また世界の共産

主義者の運動によっておしえられたのである。

と。このロシア革命の世界史的意義、とりわけ日本の革命運動、労働者・農民のたたかいとの関連を位置づけつつ、「シベリア出兵」としての革命干渉戦争、それに抗して闘いぬいていった労働者・農民、なかんづく佐藤三千夫らのシベリアでの闘いについて評価するのであった。

「このときにわれわれのぜひとも記憶しなければならぬ一つのことがあった。それは、日本の労働者がロシア革命に対してたんに海をへだてて同情し共鳴したばかりではなく、先進的な自覚ある労働者、進んだ革命家たちが海を越えてシベリアにわたり、身をもってロシア革命の成就をたすけ、侵略しきった日本ブルジョア軍隊にたいして、ロシア革命を破壊するな、われわれの兄弟の国、労働者の天下ソビエト・ロシアにたいして、ソビエト・ロシアの労働者・農民にたいして銃をむけるな、という宣伝を勇敢におこなったことである。非常な困難をおかして、われわれの同志、尊敬すべき先覚労働者は、シベリアにおいて、またすすんではヨーロッパ・ロシアにまでゆき、身をもって革命をたすけ、日本帝国主義の侵略にたいしてたたかったのである。同志佐藤のごときは、シベリアにおいてロシア革命擁護の非常に困難な英雄的闘争に身をささげて、ついにその地にちりはてた。ロシア革命は実際に日本の進んだ労働者自身のものである。すなわち、ボルシェビキー当時は過激派と呼ばれ、鬼のごとくいわれていたが、資本家にとっては恐るべき過激派であろうが、労働者にとっては真の味方であり指導者であるし、もっともすぐれた世界的革命指導者レーニンによってひきい

られた鉄のごとき革命党ボルシェビキこそ、労働者の真の前衛であり、労苦大衆のもっとも信頼すべき味方であるということの理解を、日本の労働者は身をもってしめしたのである。」と。『市川正一公判陳述』の一節であった。

三、徳永直と佐藤三千夫

共同印刷争議に参加して解雇された体験にもとづいて書きあげた『太陽のない街』で知られたプロ文学者徳永直は、一八九九（明治三二）年一月に熊本県に生れていた。佐藤三千夫は、一九〇〇（明治三三）年一月に宮城県に生れていたので、徳永直はちょうど一年の年長ということになる。

徳永直は、佐藤三千夫が死んだ翌年、一九二四（大正一三）年に佐藤トシヲと結婚し、そのために佐藤三千夫の郷里、宮城県登米郡登米町を訪ずれていた。佐藤トシヲは三千夫の縁者であった。トシヲの祖母ヨシは、佐藤三千夫の実父唯助の姉に当っていた。従って、トシヲは三千夫にとっては従姉（ミヨ）の娘に当っていたが、年が余り隔たっていなかったので従兄妹のような関係にあり、トシヲは三千夫の父を「唯助おじ」と呼んでいた。

佐藤三千夫について徳永直が知ったのは、かって東京に呼んで同居していたこともあるトシヲの祖母ヨシが死んで登米町までトシヲと一緒に出かけて行って、帰ってきてからの妻トシヲの話であった。一九二九（昭和四）年のことであった。

「ミヅオさんどうしたろうね！　かえるとき、唯助おじさんがでてきてね、こっそりといった。おめいのていす（亭主）もシャカイシュギなそうなが、うちのミヅオもシャカイシュギになってなア、生きたのやら、死んだのやら、わからなくなったど」

と。でも直はその時は、「私も何のことだかわからず、聞きっぱなしで」あったと『日本人サトウ』でのべていた。「ミヅオ」とは三千夫の東北なまりの発音であった。

ロシア革命に参加し、シベリアにおいて活動していた佐藤三千夫の死の重大性に徳永直がきづくのは、三千夫の父唯助が、三千夫のことについては他言することなくして一九三七（昭和一二）年に死に、佐藤家の後継問題で、三千夫の妹キヨが養子をとるために、戸籍上、三千夫の死を確認する必要があり、縁者であり、三千夫とは小学校のころの同級生であった伊藤政雄が、さきにものべた「遠藤始郎」という「ナンカツ労働組合の者」がもってきて、佐藤唯助に渡した例のパンフレットと写真をもって上京してきた時にはじまる。それは唯助の死の翌年である一九三八（昭和一三）年春のことであった。そして一九四五（昭和二〇）年に登米町に疎開していたとき、伊藤政雄とともに、唯助がつくったという三千夫の墓を調べていた。その後、そこには三千夫がシベリアで書き残したというノート類を埋めたことがわかり、それを掘りお

こしてはみたが、ノート類はすでに腐食していた。

「間もなく終戦になって、東京へもどってから、伊藤政雄の手紙で、遺品が埋めてあると知った。早速、三千夫の姉たちの手で、墓がほっくりかえされて、とりだされたが、ノートはみな駄目になってしまっていた。」

と『日本人サトウ』で徳永直は書いていた。その後、徳永直は伊藤政雄からの佐藤三千夫についての思い出を聞きとり、日本共産党史資料委員会を訪ね、シベリアで佐藤三千夫に会ったという老人も訪ねていた。この老人は、一九二五～六（大正一三～四）年頃「星一」と変名して活動していた人物であった。

「日本人サトウを知らないか？」

今度、ソ連から帰ってきた日本兵隊たちのうち、シベリアや沿海州で、ソ連将校からそうたずねられた人々は少なくないらしい。四七年頃、人を通じてソ連に永くいた日本共産党の野坂参三に、佐藤三千夫のことを聞いてもらったとき、「同志佐藤の名は、モスクワで幾度も聞いた。しかし、同志佐藤がどんな人か、自分は知らない」と答えた。

とも書いていた。こうして徳永直は『日本人サトウ』を一九五〇（昭和二五）年七月に書きあげていた。

この『日本人サトウ』の末尾には、「この一篇を父親佐藤唯助の墓前に捧ぐ」と書き加えていた。徳永直がこのすばらしい佐藤三千夫の生涯を追い求めたものは、市川正一の公判陳述

における「ロシア革命は実際に、日本の進んだ労働者自身のものである」という言葉に象徴される人間像を佐藤三千夫に求めようとしたためであり、また『日本人サトウ』の結びに述べるような、進んだ労働者「佐藤三千夫の復権」を求めたがためであったろう。

「『日本人サトウ』は、いつ日本海を越えて、故郷宮城県登米町に帰ってくるであろうか。いつ父唯助は『国の迷惑をかけた』と思い込んでいる悴への誤解をとくことができるであろうか。それはまだ今日、明日というわけにいかぬかも知れない。しかし、いずれ悴は日本海を越えて、父親の墓のそばにもどってくるであろう。地球の六分の一であった『人民の国家』は、他民族にも広がって、今日ではすでに地球の三分の一まで拡大している。いずれ遠からぬ将来に、三千夫は日本の労働者農民の花環にもかざされて、日本海を越えてもどってくるだろう。」

と。それにつけても、この『日本人サトウ』を毎日新聞社刊の『戦争文学全集』第一巻（昭和四七年四月刊）に何故いれたのであろうか。巻末に「解説」を担当した江藤淳は六頁にわたる解説の中で徳永直『日本人サトウ』については「第二次大戦後に書かれた徳永直の『日本人サトウ』は、敗戦直後の国際情勢の反映があまり露骨であって、サトウの姿がソ連の影にかくれてしまうのが惜しまれる。」と一行余りで片付けていた。あまりにも杜撰な、江藤淳の意識の低さを実証するかのような解説であった。なお『日本人サトウ』を雑誌『人間』（一九五〇年六月号）に掲載した徳永直は、五一年一一月号の『人民文学』に「ロシヤ革命に一命をささげ

た日本人サトウについて」を叙述してその顕彰につとめ、同月二七日には登米町で「佐藤三千夫追悼会」を開催していた。そして『人民文学』の五二年二月号には「同志佐藤の追悼会」を載せていた。

四、対露非干渉・「労農ロシア」承認運動と日本の労働者・農民たち

「ロシア革命は実際に、日本の進んだ労働者自身のものである」という市川正一の言葉のごとく、日本国内には対露非干渉運動、「労農ロシア」承認運動が繰り広げられ、その運動は日本人民のたたかいをささえ、それを助長していった。佐藤三千夫のシベリアでの活動はこれに呼応するものであった。

「シベリア出兵」の兵隊たちの中には、佐藤三千夫らのようなロシア革命をささえ、「シベリア出兵」の非を訴えるビラを読み、その働きかけをうけ、ロシア革命を勝利にみちびいたロシア労働者・農民の姿をみて新しい意識にめざめていった数多くの人たちを生み出していった。このような人たちが復員後、日本の農民運動、労働運動を支えていった歴史的事実は決して見落すことはできない。さきの『ロシア革命とシベリア出兵』で論じた福島政広翁もその一人であった。八〇才を越えた今も、自動車整備の労働者として働きつづけ、日本共産党員として活

動し続けている。

また、革新運動の先頭に立って、戦前戦後を通じて一貫して闘い、八〇才を越えた現在も日ソ友好協会の一員として活動している大場憲郎翁も、「シベリア出兵」の兵隊ではなかったが、ロシア革命をまのあたりにみ、「シベリア出兵」反対のビラを、現地シベリアで撒いた活動がその出発点になっていた。農民組合の運動をともにたたかい、常に法廷闘争の先頭に立ってたたかった自由法曹団所属の弁護士小岩井浄も、東京帝国大学三年生の時、単身でシベリアにおもむき、ロシア革命とシベリア出兵の事情をまのあたりに見ていた。根本孔衛「小岩井浄」(『自由法曹団物語—戦前—』—日本評論社刊)では、「小岩井が見た革命に向って、ひたむきに進むソ連人民の姿、堕落した日本帝国主義軍隊のありさま」は、「彼の社会主義思想を肉づけ」するものであり、「兵士の中からは革命に共感をもつ者もえるようになった」(同上書三八三頁)とも記していた。

一九二八(昭和三)年の「三・一五事件」が引き起されるまでは、日本農民組合の最も高い組織率をもち、最も積極的に活動していた香川県農民運動においても、この「シベリア出兵」の兵士だった農民たちの果した役割は大きかった。それは「米騒動」による影響よりはるかに強かったという。栗原百寿「香川県農民運動史の構造的研究」(農民運動史研究会『日本農民運動史』—東洋経済新報社、昭和三六年刊)によると

「むしろ香川県では、山神氏の談によれば、善通寺師団のシベリア出兵が行なわれたことの

ほうが農民運動にとって重要であって、（米騒動による影響よりもという意ー新藤注）大正七、八年のシベリア出兵によって階級意識というよりも封建的観念から脱却するようになり、日農支部の幹部となったり、郡連合会に出、積極的に活動したものが多いということである」（同上書七六五頁）と述べていた。なお、一例として一九二〇（大正九）年一一月に岐阜県安八郡三城村の小作人組合が地主に対して二〇〇町歩の小作地の共同返還によって小作料引下げ要求をたたかった小作争議について調査して同県警察部の報告をあげることができる。「この村のもので歩兵伍長として長くシベリアに従軍し、ガイセン後社会主義労働問題に思いをひそめていたものが、地主対小作人の現状をみ、大なる不満をいだき、同志とともに安八・揖斐・本巣の小作人に対し、地主の横暴と小作人の権利伸長とをのべた宣言文を発して、三郡小作人の団結を勧誘したことがこの大勢をいたした原因である」（青木恵一郎『日本農民運動史料集成』第一巻五二頁三一書房刊）と評価していた。

ロシア革命によって生み出されたソビエト政権に対する日本の農民・労働者の関心が次第に高まり、「労農ロシア」承認、「シベリア出兵」に対する「対露非干渉」の運動が強まっていたことは否定出来なかった。例えば、一九二二（大正一一）年四月に結成した日本農民組合でも積極的に「労農ロシア」承認の運動をくりひろげていった。その機関紙『土地と自由』第九

号（大正一一年九月二五日号）によると、同年八月の日本農民組合北河内連合会での主催になる山田村中宮西方寺で、開催していた第一回の巡回農民学校において、杉山元次郎より「飢えたるロシア」の話を聞いた農民たちは、カンパに応じて一円六五銭が集められていた。また同紙の「ロシア飢饉会計報告」によるとこの九月には、中宮支部三円、片鉾支部五〇銭、興降支部三円を集めていたので、日農の各府県支部でも、この取り組みをやっていたことがわかる。

この「労農ロシア」承認、「対露非干渉」運動、「露西亜飢饉救済」運動は各種の労働組合でも、水平社、婦人団体等での取り組みもあった。これらの問題について分析したものに奥田修三「大正期労働運動と『労農ロシア』承認運動の展開」（『立命館産業社会論集』第一〇号ー昭和四八年九月、立命館大学産業社会学会）があるので、それを参考にして考えてみようと思うが、当時の労働者が対露問題をどのように把えていたのかを、一九二三（大正一二）年五月三日に大阪天王寺公会堂でもたれた労働総同盟関西同盟会による「対露問題大演説会」での労働者の発言を聞いてみよう。この時は、弁士一八名が登壇しており、その多くは「弁士中止」を臨席警官によって言い渡されていた。

○「対露問題大演説会」ー労働総同盟関西同盟、一九二三年五月二七日、於天王寺公会堂。

福岡新之助（硝子工組合）　露ノ革命ヲ謳歌シ、後ロシアノ成功ハ万国無産階級ノ勝利ト云ヒ（中止）

前田（機械労働組合）　我々ハ犠牲ヲ払ッテ露ノ承認運動ヲセウ

田坂二郎（電業員組合）　二港事件（ママ）ノ責任者ハ我国ノブルジョアダ。我々ノ対露問題ヲ政府ヤ資本家ニ任ス事ガ出来ナイ（中止）

田中喜代馬（造船労組）（中止）

三田村四郎　二港事件（ママ）ノ責任者ハ日本国家ダ。ブルジョア国家がロシアト通商シタイノハ功利的ナ打算カラ来テヲル。無産階級ガ労農ロシアヲ承認シタイノハロシアガ無産階級ノ国家デアルカラダ（中止）

逸見直造　借家調停法ハ借家人ノ為ニナラヌ。「日本ニモ労農ロシアノ如キ住宅委員ヲツクラナケレバナラナイ。」

金共全「労農ロシアト通商スル事ハ我々朝鮮人ニ非常ニ利益ヲ蒙ル」「対露通商ヲ促進サレンコトヲ」

堺利彦　世界ヲ横ニ分ケルト資本家階級ト労働者階級ニ、支配階級ト被支配階級ニ、搾取階級ト被搾取階級ニ分ケルコトガデキル、とのべただけで（中止検束）

中村義明（電業員組合）　前述の東上の件につき報告「我々ハ対露問題ヲ一部ノ政治家ノミニ任ス事ハ出来ナイ。労農ロシアハ国境的超越デ階級ヲ忘レテ」（中止）

井上良治（反逆団）　ブルジョア国家ハ通商セントセバ、ロシアヲ承認シナケレバナラナイ。（中止）

野田律太（野武士組）　ヨッフェ、江藤新平（ママ後藤新平か―新藤）の上京面接報告「ロシアヲ完全ニ承認スル事ハ資本家も利益ダ。ロシアガ完全ニナル事ハ世界中ノ労働者ノ幸福」（中止）

浅井富太郎（機械労働組合）　ブルジョアハ通商ヲ叫ブガ我々ハ承認ヲ叫バナケレバナラナイ。

辻井民之助（京都連合会長）　無産政府主義者ノロシア論ハ間違イデアル。我々ハロシアニ対スル態度ヲシッカリキメナケレバナラヌ。ロシアハ我々ノ兄弟、味方デアル（中止）

細迫弁護士　アナキストの批判をしたのち「資本家ガ通商問題ニ対シテ利己的立場カラ提灯ヲ持ッテヲル。我々ハ対露問題ヲ資本家代表ニ任ス事ハ出来ナイ」（中止）

小岩井弁護士　大連長春会議ノ決裂ハ戦勝国ノ態度デ臨ンダ日本ノ欠陥ニヨル。

鍋山（電業員組合）　日本ハ戦勝国ノ態度デ臨ムコトハ以テノ外。露西亜不承認ハ日本国ヲ栄エサセナイ（中止）

仲橋初太郎（鋳導聯合会―ママ）警官横暴ノコトヲノベ（中止）

藤（大阪合同組合）　警官横暴ヲノブ（旧協調会文書―『日本社会労働運動史資料』＝マイクロフィルム―奥田修三の前掲論文による）

この関西同盟会では、五月三日の「対露問題大演説会」にひきついで、同月二七日には、や

はり大阪天王寺公会堂で「対露通商促進演説会」を開き、「我々ハ対露問題ヲ政府ニ一任スル事ハ出来ナイ。我々ハ労農政府ヲッブス様ナ事ガアッテナラナイ」（早本＝機械労働組合）、「労農ロシアノ盛衰ハ我々ノ盛衰ダ（中止）」（村尾重雄＝合同組合）、「ロシアハ我国ノ数十倍ノ広サヲ有スル立派ナ共産主義国家デアル。ソンナ立派ナ国ト通商スルノハ全人類ノ為デアル。日本政府ハ英米ニ恐怖セズ又露ニ尼港責任ヲ問ハズシテ一日モ早ク通商セナケレバナラナイ」（佐山勇＝造船労働組合）「尼港事件ハ我国ガ勝手ニ招イタ傷デアル。露ト通商セントスレバ露ヲ承認スル一大決心ガナケレバナラナイ。我々ハ昨年メーデーヨリ対露通商承認ノタメ運動ヲ続ケテヲル。ブルジョア共ハ後藤子ヲ動カシテ対露問題ヲ解決セントシテヲル事ハ我我ト相一致シテヲル様ニ見エルガ、実質上相一致ハシテヲラナイ。ブルジョア共ハ己レヲ救ハンガ為ニ己ムヲ得ズ露ヲ承認セントシテヲルノダ。実ニ憎ムベキ対度（ママ）デアル。プロレタリアハ理想社会ノ事実ニ近イ無産国家ノ先駆者デアル露ヲ救ハンガ為ニ露ヲ承認セヨト叫ンデヲルノダ（中止）」（中村義明＝電業組合）、「ロシアノ盛衰ハ全世界ノ労働者ヲ解放スル（中止）」（浅井富太郎＝機械労働組合）、「ロシアガ新経済政策ヲ採用シタノハ共産主義国家ノ実ヲヨリ以上揚ゲンガタメデアル。我々ガ露ト通商セントスルノハロシアノ根底ヲ鞏固ニシタイ。ロシアヲシテ共産主義国家ノ実ヲ揚ゲシメタイカラデアル。ソシテ我々ハロシアト手ヲ握リタイカラデアル。我々ハ後藤子ノ手デ日本ガ露ト通商スル事ガアッテモソレヲ以テ満

足シテハナラナイ。我々ノ目的ハモット先キノ事デアル。」（河野法学士＝労働学校講師）、「ロシアデヤッテヲル事ハ日本労働者ニ不利ナ事ハ少シモナイ。ロシアガ新経済政策ヲ採用シタノハ資本主義ニ降参シタノデハナイ。尺取虫が伸ビントスル時縮ムヨリモット意味が深イノダ。ロシアガ新経済政策ヲ持ッタノハ工業復活ノ為メダ。資本家ヤ軍国主義者ハ搾略（ママ）トシテ通商ヲ叫ンデヲルノダ。我々ハロシア人ト完全ニ握手シタイガ為ニ通商ヲ叫ブノダ（中止）」（山本懸蔵＝関東鉄工組合）と叫んでいた。

「シベリア出兵」に反対する論調は、すでに一九一八（大正七）年の『東洋経済新報』によるすぐれた主張があり、『ロシア革命とシベリア出兵』で論じたところであるが、対露非干渉シベリア出兵反対、「労農ロシア」承認の問題が、農民・労働者のものとして幅広く運動をくりひろげていくこととなったのは、フランスの文芸運動にならってはじめた小牧近江らの「種蒔き社」より発行した『種蒔く人』でよびかけた「ロシア飢餓救済運動」がその発端であった。それは一九二一（大正一〇）年一〇月の第二次『種蒔く人』創刊号よりはじまった。

「労農露国は内争と外敵に弱っている。世界の労働者、無産者は世界革命の前衛である所の赤色露国の餓死を傍観す可きであろうか。或国の労働者は一日の無給日を以て饑餓に瀕せる同胞に穀物と医薬を送ろうとしている。我々は露国の労働者が要求もせぬ兵士を送ることによって満足が出来ようか。露国の労働者はパンを求めている。」

とその創刊号で「労農露国の大飢饉」を報じ、ゴーリキーやチホン大主教の訴えを紹介してい

た。雑誌『種蒔く人』はひきつづいて「ロシア飢饉救済」を掲載していくが、この提起によって、同年一一月二八日には「東京麹町区元園町」の旧社会主義同盟本部に結集した労働団体・思想団体約四〇の有志一〇〇余名によって「露西亜飢饉同情労働会」が結成された。そして翌一九二二（大正一一）年一月に創刊された『前衛』で、『種蒔く人』の運動に呼応して、山川均「露国の飢饉を救へ」を掲載してその運動を盛りあげていった。こうして同年五月の第三回メーデーのスローガンに「労農ロシアの承認」がかかげられることとなった。

この運動の盛りあがりのもとで、「シベリア出兵」の撤退、ロシアとの通商貿易開始、ロシアの飢饉救済をスローガンにして六月二二日に「対露非干渉同志会」が結成されていくことになった。同志会結成への過程には、五月に日本労働総同盟に対するイギリスの「対露非干渉委員会」（ウィリアムス国際運輸同盟会長、マグレアン＝イギリス労働党執行委員）よりの呼びかけ「シベリアにおける日本軍─抑圧・暴行・虐殺の記録─万国の労働団体にうったう」にこたえて、同盟執行委員会では「無用有害なるシベリア駐兵に反対し、即時撤兵を要求」「世界経済の現状にかんがみ、すみやかに対露通商を開始せんことを要す」という二項目を決議して、その代表が政府に「シベリア撤兵」を申しいれていたという経過があり、これも一つの大き同志会結成への力となっていた。またこの運動展開にさきだってすでに一九二二年一月一四日に在日朝鮮人学生組織同友会主催になる「ロシア飢饉同情音楽会」が開かれていたことも重視しなければならないであろう。

対露非干渉、「労農ロシア」承認運動は、「ロシア飢饉救済」運動を基軸にしながら、それと併行して広められることとなり、労働運動、社会主義運動とあわさって展開していった。そして一九二二〜二三年にかけて盛りあがったのである。一九二二年の労働事情を報ずる大原社会問題研究所『日本労働年鑑』大正十二年版では「ロシア飢饉救済問題」の一項を設けていた。

一九二二年一〇月一〜三日に大阪でもたれた日本労働総同盟の「大正十一年大会」では、『対露問題に関する決議案』が本部提案として出され可決をみていた。この『決議案』は、「決議文」として「日本政府は露西亜全土より無条件即時撤兵すべし」、「日本政府は労農ロシア政府を正式完全に承認し、即時通商を開始すべし」とする二項であり、「実行案」としては、「右決議文を可決の上は、先に総同盟会長並に主事宛に文書を送り来れる在英国対露不干渉委員会に回答文を送ること」とするものであった。この大会宣言では対露問題を大きくとりあげていた。

「我等は従来標榜し来った労農ロシアの承認、シベリア即時無条件撤兵、対露通商開始を飽く迄主張する。これ我等が日露両国並に東亜の平和を切望するが故である。我等は今回の長春会議に失敗したけれども、出来るだけ近き将来に於て再び日露両国の会議が開催されて以て政治上並に経済上両国の福利に貢献せんことを期待する。」

とするのがその主張であった。「長春会議」（一九二二・九・四〜二五）は長春で開かれた日ソ国交樹立のための会議で、大連会議（一九二一・八・一六〜二二・四・一六）にひきつぐ第二回会議であった。この第二回会議も第一回会議の時と同じように、日本は通商条約のみを主

張しソビエト側は即時完全撤兵を主張して決裂していた。

日本労働総同盟が対露問題をなぜ重視するのかについて「大正一一年大会」後にもたれた対露問題についての「大会記念演説会」（一〇月三日夜―大阪中央公会堂、一〇月四日夜―神戸青年会館）における河田賢治の意見を聞くことにしよう。

「労働者が労働運動のみをなす時代は去り、政治運動をも併せて之を為さざれば効果尠き時と為った。故に我々は政治運動にも手を染めねばならない。露国問題を云々するのはこの為である。露国を紛糾せしものは過激派にあらず」「革命派（ママ）と日本政府が領土的野心を以てし、欧州列強は露国の資源に垂涎し、共にブルジョア的外交と政策によって、露国の内政に関渉（ママ）するものである。我等プロレタリアは労農政府との外交を望み、之を為さしむ可く政府を監視しなければならぬ。故に我等は労農政府を完全に承認し、之と通商することを決議した。この運動に対して応援せられんことを望む」

（協調会情報課『本邦労働運動調査報告』大正一一年一二月、日本労働総同盟大会関係は本資料による。奥田修三前掲論文による。）

かかる河田賢治の主張はさきにあげた一九二三年五月の日本労働総同盟関西同盟会の「対露問題大演説会」における労働者の主張の中にもみることが出来る。「労農ロシアの民衆の為めに、日本の無産階級の勝利の為めにも、無産階級の国際的協力の為めにも、対露非干渉運動に決死の努力を払はなければならぬ」と主張する中村義明「無産階級政治運動としての対露非干渉運動」（関西同盟会機関紙『労働者新聞』大正一一年九月一五日号）もそのことを強調し

ていた。

「―ロシアから手を引け―白い寒冷紗のふきながしが、高い竹竿のてっぺんで、風にひるがえりながら、私たちのところから二十間ばかり先に進んで行く。低くかまえた赤旗の槍の穂先が、密集している人々の頭の上でにぶく光り、団体ごとに割りあてられたスローガンのふきながしが、行進のうねりごとに、間近かに重なりあったり、遠く離れたりした。「失業反対」、「長時間労働の廃止」などいったもののうちに、墨くろぐろと、「シベリア出兵反対」などいうのも、人々の頭上でおよいでいる。左右は樹立、遠くに石の反り橋がみえるところだった。先頭がつかえて私たちは足ぶみしていたが、―ロシアから手を引け―という大文字が、尻をはねあがらせて空をそよいだ。私たちのそばを一個小隊ばかりの黒い警官服が、つるしあげた帯剣をおさえながら、砂利をけって、前方へかけて行った。

「ワッショ、ワッショ、ワッショ」

旗竿のまわりがふくれあがった。スクラム組んだまま、私たちは押していった。竹竿は一旦もち上がって、またかしぎ、寒冷紗のふきながしは、激しくけいれんしている。竹竿の折れる音が聞えた。ちぎれそうに伸びた私たちのスクラムの上に、人間が落ちてきた。びしんと腕がしびれるようで、誰かが叫び声をあげている。飛ばされた帽子を拾おうとした警官がふんずづけられて、その上に私はころがった。砂利道に頬をぶっつけて、むせっぽい乾いた

匂いで呼吸がつまった。手も足も不思議なくらい自由がきかない。起きあがろうと一生懸命に警官の靴のかかとをつかんでいると、頭の上で揺れ動く人々の間から、ひっちぎられた寒冷紗のふきながしが、たかい松の枝にひっかかりながら、逆さに泳いでいるのがみえた。
ーロシアから手を引けー。」

（徳永直『日本人サトウ』前掲書三一〇ー一一頁）

一九二二～三（大正一一～一二）年ごろの徳永直の体験であった。深川公園を出た時の出来事であったか、芝山王台を出た時であったか、「大正一一年の中間デモだったか、大正一二年の第四回メーデーだったか」その記憶はさだかではないが、東京での事情は徳永直が回想するようであったであろう。また、直はロシア飢饉救済運動、対露非干渉運動に参加した体験を、

「この頃、日本の労働者のあいだにも『対露非干渉同盟』がつくられていた。『ロシアから手を引け』『人民の国家ソビエット・ロシアをまもれ』というのが合言葉になっていた。大正九年と十年、一九二〇・二一年に、ロシアに飢饉があった。『ロシアを飢饉から救え』という運動は、大正一〇年から一一年にかけて、全日本の労働者、農民のあいだに起ったのを覚えている。私たちは切符を売った。回数乗車券みたいな紙片は、ミシンがいれてあって、一枚が六片ある。一片が五銭で、ミシンごとにちぎって売った。」

とも述べていた。「ロシア飢饉救済」の運動は学園のなかでもくり広げられていた。春日庄太郎（日本共産党関東地方委員会委員長）の「三・一五事件調書」（第二回尋問調書昭和三年五

月八日）では、「ロシア飢饉の寄付金の募集をなしたことが学校当局の耳に入り退学させられました。」（『部落問題・水平運動資料集成』第二巻四〇頁、三一書房刊）と立命館四年退学の理由を陳述していた。このような日本民衆の運動のたかまりの中で、政府は尼港事件をたてにひきのばしてきた干渉戦争を終結してシベリアから軍隊をひきあげざるを得なかった。一九二二年六月に撤兵を決議し、一〇月にシベリアよりの撤兵は完了していた。しかし、尼港事件賠償の保障占領を主張して樺太（サハリン）には駐兵させたが、一九二五（大正一四）年五月にはここからも撤兵することになった。

一九二〇年五月にひき起こされた「尼港事件」については、『ロシア革命とシベリア出兵』での「ニコラエフスク事件の歴史的評価」でもふれたところであるが、「シベリア即時撤兵」を決議した一九二〇年五月のメーデーののちに労働組合の連合組織としての「労働組合同盟会」が結成されているが、この同盟会の第三回代議員会（六月二六日）には「尼港事件に対する労働団体の態度につき討議」がなされており、友愛会、交通労働組合、汎労会、工人会は、「尼港事件に対しては、社会的に何等の行動を採らざる事」、「事件の真相を全労働者に周知せしむる事」が主張されていた。信友会、正進会、啓明会では、「出兵に反対すると共に資本主義と侵略と軍国主義との打破に向って進まん」ことが主張され、結局は「労働組合同盟」としては、

〇各団体各自由行動を採ること

○労働組合同盟会は何等の行動を為さざることに決していた。（大原社研『日本労働年鑑』大正一〇年版三四頁、奥田修三、前掲論文による）

「労農ロシア」承認運動、通商要求の動きは、日本のシベリア撤兵を完了し、一九二三（大正一二）年二月に長春会議のソビエト代表であったヨッフェが東京市長・後藤新平の招待によって来日した段階で新たな発展を示し、すでに述べた日本労働総同盟関西同盟会による集会をはじめとする運動がくり広げられていった。全国水平社で「労農ロシア」承認を可決するのは一九二四（大正一三）年三月の第三回全国水平社大会であった。「労農ロシア即時承認の件」であった。でも、すでに一九二三（大正一二）年三月の第二回大会の時にも「労農ロシア無条件承認の件」が出されていたが、これが保留になったためであった。アナーキストたちは「労農ロシア」承認運動には反対していたためであった。

この運動の展開のもとで、一九二三（大正一二）年九月一日には関東大震災があり、尽大なる日本の被害を知った、たちあがったばかりのソビエトの労働者・農民たちは、はやくも九月一三日にはレーニン号に「震災救援物資」を積んで横浜港に訪ずれていた。日ソ人民の輝ける国際連帯であった。しかし、時の政府はこの入港を拒否したのである。「救援物資」は届かなくともそれ以上に、日ソ人民の心の連帯は強められていった。このきずなは日本の労働者・農民の間にひきつがれていくこととなった。「労農ロシア」承認の運動は、一九二三（大正一二）年九月からヨッフェに代ったカラハンと日本の中国駐在公使芳沢謙吉との交渉がすすめられ、

一九二五（大正一四）年一月二〇日、北京において日ソ基本条約、権利に関する議定書などの調印をみるにいたって、その歴史的役割はおえていくが、労働運動、農民運動の中に理想の国「労農ロシア」として生き続けていった。

「資本家地主の国では、労働者農民を抑えつけ、窮乏泥沼の底にケオトシしているとき、労働者農民の国ソビエートロシアでは、失業者は一人もなく、男も女も一日労働時間の七時間で、賃金は最高百五〇円から二百五〇円をうけ、四日働らいて一日は有給で休むことが出来るし、子供が生れてから九ケ月間は牛乳を無料で与えられ、子供の保護所、母の保養所、ロ所、娯楽場の設備は都市は勿論、農村でも完備されている。農業は機械化され、電気・工業・礦業はグングン発展し、五ケ年計画事業は四ケ年で完成し、工業生産の量は世界第二位を占め」

というのは一九三二（昭和七）年一〇月二六日に佐賀県鳥栖でもたれた全農福佐連合会（全会派）第五回大会での運動方針における「国際的情勢」の一節であった。世界恐慌のもとで苦しむ農民たちにとって「労農ロシア」はますます輝いてみえたのであろう。この大会で挨拶に立った福岡支部の代表岩田重蔵（現在日ソ協会福岡県連合会長）は「世界の資本家地主の国では不景気で労働者農民は飢え死しやうとしている時、ソビエトロシアで—」といったところで臨席警官によって「弁士中止」をいい渡され降壇させられていた。

ロシア革命に命を捧げていた佐藤三千夫が、ロシア革命に命を堵してシベリアの野に散った時、日本国内では労働者、農民によって「対露非干渉」運動、「労農ロシア承認」運動がくり広げられており、雑誌『進め』に「赤旗の下に眠る佐藤三千夫」が載った時期はその運動の最高潮に達していた時であった。しかし、この事実は日本の労働者、農民には余り知らされていなかった。日本の労働者がロシア革命をささえて闘っていた事実がもっと多くの当時の農民・労働者に知らされていたなら、この運動の大きな力となっていたことであろう。

一九二七年四月に成立した田中義一内閣は若槻礼次郎内閣とうらはらに「対支」強硬外交を展開し、中国国民革命をおさえようとして同年五月には山東出兵を断行し、翌年には第二次、第三次の山東出兵を強行していた。この動きに対してまず全国無産団体代表者会議では一九二七年一月にすでに「対支非干渉」のスローガンをかかげやがて農民、労働者の間にその運動は広まっていくこととなり、統一戦線結成のための一つの重要な課題となるが、この運動とあわさって労働農・農民は「シベリア出兵」の非を訴え、「労農ロシア」を夢みていた。

五、シベリア出兵反対・対露非干渉・「労農ロシア」承認運動関係年表

一九一八（大正七）年

3月。『東洋経済新報』はシベリア出兵反対を主張し「露西亜悲観すべからず」（八〇七号—三月五日）、「出兵提議の失態」（八〇八号—三月一五日）、「過激派を援助せよ」（八〇九号—三月二五日）。

4月。吉野造「所謂出兵論に何の合理的根拠ありや」—『中央公論』四月号

7月。『東洋経済新報』25日号で「過激派政府を承認せよ」を主張（七月〜九月米騒動）

10〜11月。友愛会機関誌『労働及び産業』（産業労働調査所）に革命一周年を記念して「露西亜革命の感想」一四篇を掲載。

一九二〇（大正九）年

5月。第一回メーデー（東京）のスローガンに「シベリア即時撤兵」をかかげる。他のスローガンは「治安警察法第17条撤廃」、「失業防止」、「最低賃金法の設定」、「八時間労働制」、「公費教育の実現」をあげる。

。尼港事件おこる。「労働組合同盟会」（労働組合の連合体）はこの問題については「各団体各自由行動を採る」、「労働組合同盟会は何等の行動を為さる事」を決定（『日本労働年鑑』大正10年版。

7月。第四三回帝国議会に対露不干渉決議案提出。

11月。「露西亜飢饉同情労働会」を東京に結成（28日）12月から運動開始（『日本労働年鑑』大正11年版）。

一九二一（大正一〇）年

8月。佐藤三千夫ウラジオストクの木村商店を去る。この頃より革命運動に参加。

。日ソ国交樹立の大連会議はじまる（26日）。

10月。雑誌『種蒔く人』創刊号（第二次、第一次は同年二月発行、三号で休刊）で「労農露国の大飢饉」を報じてその救済を呼びかける。運動の発端となる。シベリア出兵を批判する。

一九二二（大正一一）年

1月。山川均「露国の飢饉を救へ」を『前衛』創刊号に掲載する。

。在日朝鮮人学生組織同友会主催「ロシア飢饉同情音楽会」を開催（14日）。

2月。『種蒔く人』二巻五号巻頭言「三度飢えたるロシアのために」を掲載し「飢饉という味方」をえて「ブルジョアは狂喜してゐる」と批判する。

3月。田所照明（ママ）「飢えたる露西亜を！」『前衛』三月号に掲載。

。全国水平社の結成。

4月。日本農民組合の結成。

5月。第三回メーデー『労農ロシアの承認』をスローガンに入れる。（東京メーデー）

。日本労働総同盟中央委員会は「シベリア撤兵」「日露通商再開」を決議。

。英国対露非干渉委員会よりのよびかけパンフ『西伯利亜に於ける日本人』とどく（14日）

。日本労働総同盟中央委員会では「即時撤兵要求」、「対露通商再開要求」を議決（28日）29日に政府に要求書提出。

6月。小牧近江「青年将校の観たる西伯利出征軍の実状」（『種蒔く人』二巻九号）シベリア出兵批判なくしてロシア承認運動の資格ないと主張。

。『前衛』六月号表紙に「飢えたるロシアを救へ」を掲載して、この誌上で「露国飢饉救済金募集」をよびかける。この募集よびかけでは、「五年前の一一月七日、この日露西亜の民衆は暗黒の底から初めて光明の世界に躍り出た。彼等は三〇〇年間の虐政の倒れた廃墟に農民と労働者の国家を打建てた。」と書きはじめ、国内の反革命「資本主義の列国は経済的に封鎖」したが、これとたたかってやっと二〇年一一月には「最後の反革命軍（ウランゲル軍）」を破り、二一年三月にはイギリスと通商条約を結んで「彼等の前途は初めて光明に輝く」ものとなってきた時、この飢饉が襲来したのだとのべ、「解放の為に闘っている露西亜の民衆を餓死せしめることは、全世界の無産階級の最大の恥辱」とのべていた。イギリス、アメリカ、オーストラリアからはすでに食糧がおくりとどけられていることをのべていた。

。「対露非干渉同志会」結成（22日）「関東方面の思想団体及び労働団体の有志」により組織され、「即時撤兵並に通商開始」「露国の飢饉に対する救済金の贈与」を計ることを決定。（赤松克麿『日本労働運動発達史』大正14年3月刊、『日本労働年鑑』大正12年版）。

。新人会「対露飢饉救済演説会」開催（23日）

於　神田青年会館（協調会情報課『本邦労働運動調査報告』大正一一年一二月）。

○片山潜シベリアで「シベリア派遣日本兵士諸君に訴ふ」のビラを出す。

○日本政府「撤兵」を決議。

7月○雑誌『解放』7月号では小泉鉄「欧露飢饉惨状」と時評「日本を救へ〈飢えたるロシア〉」を掲載，時評では「撤兵」と「即時干渉中止」を主張。

また同誌では「露西亜飢饉に対する諸外国の救済状態」を報じて、この原因として「前例なきほどの大旱魃」と「列国の経済封鎖」をあげ、「世界の人々は露西亜の共産主義の讃美者も、否定者も」すべて贈物をとどけているのに「我が日本は鐚一文の贈り物をしてゐない」ことを批判し、解放社も「救済資金の募集に着手」したことをのべていた。

○新人会「対露飢饉救済演説会」（11日）於神田仏教会館。

○日本労働総同盟関東同盟会委員会は「ロシア飢饉デー」を設置を協議（13日）（『総同盟五〇年史』第一巻）

○総同盟関西同盟会「労農露西亜の飢饉を救へ」を機関紙『労働者新聞』66号（七月一五日号）に発表し、救済金募集を訴える。

○秋田で種蒔き社支部他文化団体、婦人、宗教団体とともに土佐港祭典を利用して二ヵ所で慈善バザー二五〇円を集める。　○読売新聞主催「露国飢饉救済大演説会」於帝国劇場（初旬）

○日本共産党の成立（15日）

8月○「労働者ロシア飢饉救済委員会」を労働総同盟、関東方面各組合代表によって組織、八月六日、九月三日「露国飢饉救済デー」として街頭募金二、七〇〇円を送金。（赤松克麿『日本労働運動

発達史』、『総同盟五〇年史』『労働者新聞』大正一一年九月一五日号）。

○総同盟関西同盟会「ロシア飢饉の実情—万国の労働者は救済に向って結束せよ—」（『労働者新聞』67号—8月31日）を発表して再度救済金募集を訴う。「英国労働者救済委員会の活動も紹介。ロシアが救われることは日本が救われることだと説く。

○向上会（大阪砲兵工廠の労働者の組織）は「労農露国飢饉救済募集の件」を可決（『日本労働年鑑』大正12年版）

○日本農民組合北河内連合会主催「第一回巡回農民学校」（於山田村中宮西方寺）でロシア救済寄付金募集。

○『種蒔く人』（三巻一〇・一一合併号、一日発行）の巻頭に「世界平和・人類愛・撤兵と飢饉を発表、シベリア出兵を批判。

9月○「対露非干渉関西同盟」を組織。労働総同盟、向上会、交通労働組合その他の組合による。「日本兵の即時撤退」、「飢饉救済金の贈与」「労農露国の承認」を決定（『日本労働年鑑』大正12年版）。

○日ソ国交樹立の長春会議はじまる（4日）

○対露非干渉関西同盟の「対露問題講演会」（25日）於大阪天王寺公会堂（『日本労働年鑑』大正12年版）。

○「対露非干渉関西同盟」の「対露問題講演会（26日）於神戸基督教青年会（『日本労働年鑑』大正12年版）。

○「対露非干渉同盟会」の「対露問題講演会」（27日）於尼崎西性寺（『日本労働年鑑』大正12年

版）。

○『労働者新聞』（9月15日号）には大阪合同労組、尼崎合同労組、大阪機械労組、広島労正会の募金報告、大阪市電従業員演説会寄金（土佐堀青年会館）、電線工組合演説会寄金（大阪天王寺公会堂）を報告。

○「雄弁連露西亜飢饉会」の結成－東京および近辺大学、高専三二校の雄弁連盟による。早稲田大学二回、法政大学で一回の救済講演会を開く。

10月○建設者同盟『建設者』創刊、創刊号で『前衛』のよびかけに呼応して、「ロシア飢饉救済募金運動」をよびかける。

○「雄弁聯盟ロシヤ飢饉救済会」はその趣旨をもりこんだ「宣言」を発表。加盟校三二校

○中村義明「無産階級政治運動としての対露非干渉問題」（『労働者新聞』－九月一五日号）に発表

○日本労働総同盟年次大会「対露問題に関する決議案」採択－ロシア全土より「無条件即時撤兵」、「労農ロシア」の承認「即時通商の開始」と決議文の内容をもって「英国対露不干渉委員会」へ回答文を送ることを決定（1～3日大会）。

大会宣言は「対露問題」をもりこむ。「主張」に「労農ロシアの承認」をいれる。

○日本労働総同盟大会記念演説会「対露問題」を開く、於大阪中央公会堂（3日夜）、神戸青年会館（4日夜）

○シベリアより撤兵を完了（サハリンよりの撤兵を終るのは一九二五年五月）

11月○雑誌『改造』一一日号に「労農ロシア承認問題批判」を特集、アナーキスト大杉栄は「ボルシェ

イキ」は「革命のにせ物」と主張。

○ロシア革命五周年にあたり、『前衛』、『労働新聞』、『無産階級』『社会主義研究』は特集、号外と発行してその歴史的意義を訴えた。『社会主義研究』は「一九二二年の露西亜は全世界の無産階級がブルジョア世界から略取し得た最大の勝利である。最も重要な陣地である。露西亜革命を擁護することは資本制度にかわるべき新たなる社会にとっての勝利と陣地を維持することを意味している」と巻頭言でのべていた。

○東京飛鳥山公園でロシア革命五周年集会開催、一〇〇余名の警官による弾圧、二〇名検束

○佐藤三千夫ハバロフスクで死（二七日頃）

○この年「露国飢饉救済婦人有志会」（発起人、山川菊栄、茗野稚子、植原久和代、三宅やす子、河崎夏子、荻野綾子、山田わか等）関西の「覚醒婦人会」などの活動もあった。

一九二三（大正一二）年

1月○『解放』でとりくんだロシア飢饉救済カンパは昨年八月からこの一月まで二九件一、七七七円七九銭となる。応募者は「精工舎各職場」、「東京市電気局職場」「海軍工廠有志」の労働者から全国各地の農漁村、青年処女会、学生におよぶ。

2月○『種蒔く人』二月号で「飢えたるロシアの児童を救へ」を掲載。「労働者インターナショナル露西亜救済委員会第三回伯林会議」決定にこたえての活動。第一回（三月）38名25円、第二回（五月）9名7円30銭、第三回（六月）28名20円50銭、第四回（七月）14名37円50銭、（『種蒔く人』大正12年3月1－7月号）。

○労農ロシア代表、ヨッフェ来日。

○第五回官業労働大会で「失業者救済及び露西亜と通商開始の件」を可決（一〇日ー『労働者新聞』大正一二年三月一日号）。

○日本農民総同盟主催の全国農民大会（11日）「労農露西亜の即時承認」を決議。

3月○第二回全国水平社大会（二〜三日）「労農ロシア無条件承認の件」が提起されたが保留となる。（『水平運動史の研究』第二巻）。

○官業労働総同盟失業者大会で「露西亜を即時承認」を決議、（一〇日）於東京市外飛鳥山公園、（『日本労働年鑑』大正13年版）。

○日本労働総同盟・向上会共催「関西失業者大会（一五日）於大阪天王寺公会堂、「労農露国と即時通商を開始すること」を決議。他に「八時間労働制」「失業者に一ケ年以上の失業手当を支給することを可決（『日本労働年鑑』大正13年版）。

○小石川労働会「対露通商問題演説会」を開く（一六日）於東京、王子町王子劇場、参加者八〇〇名、失業問題とともにとりあげる。（協調会『本邦労働運動調査報告』大正一二年一二月）

4月○日本労働総同盟関西同盟大会（1日）で大阪連合会の中村義明「対露通商促進運動ノ件」提案。「我々ハ軍国的奴隷政策ニ反対シタイ。政府ノ北樺太占領ニ反対シタイ。政府ノ軍備的野心ニ反対シタイ。ソシテロシアヲ承認スル前提トシテ通商シタイ」と主張。大阪、京都、神戸、灘の各連合会から委員を出し実行方法を検討することで可決（協調会文書『日本社会運動史料集』マイクロ・フイルム）。

○『労働者新聞』（83号ー1日、関西同盟機関紙）は「失業運動と日露通商促進運動」を掲載。

○中村義明・野田律太は労働総同盟関西同盟大会の決議をヨッフェ、アントノフ、後藤新平に伝う（17日）。○甲野唯「同志佐藤君の死」ー『赤旗』四月号

5月○総同盟関西同盟会「対露問題大演説会」を開催（3日）於大阪天王寺公会堂　参加者一〇〇〇名。

○総同盟関西同盟会「対露通商促進演説会」開催（27日）於大阪天王寺公会堂　参加者一五〇〇名（前掲『日本労働社会運動史料』協調会文書）

○『労働者新聞』86号（10日）日露通商、ロシア承認問題を掲載。

6月○『労働者新聞』87号（1日）日露通商、ロシア承認問題を掲載。

○岡山労働組合主催「対露及社会問題演説会」開催（12日）。

○東京全労働団体連盟は「対露問題協議会」結成（16日）。

○労働団体及び政党有志「対露問題懇談会」開催（20日）。

○関東労働組合連合会主催「対露問題労働組合大会」開催（21日）「政府が速かに労農露国を承認し、之と通商を開始せんことを要求す」とい決議をあげ、「国際平和を愛し軍国主義に反対する」と理由書の中に書き加えていた。（内務省『大正一二年労働運動概況』）。

○雑誌『進め』六月号に赤岐狂平「赤旗の下に眠る佐藤三千夫」を発表。

7月○中部労働組合連合会主催「対露問題演説会」を開く（1日）於名古屋、六月二四日の役員会にては、「世界の平和を維持し、人類共存共栄の理想に基き、我日本政府が今回の日露第三次会議を必ず成立せしめ労農露西亜共和国を即時承認せん事を要求す」「失業労働者を出来る限り緩和せんがために対露通商を即時開始せんことを要求す」を決議していた。（『日本労働年鑑』大正13年版）。

。「日露婦人交歓会」開催（2日）赤爛会など婦人有志がヨッフェ夫人を招いて開く（山川菊栄「日露婦人交歓会の印象」―『女性改造』大正一二年八月号）。

9月。ソビエト代表カラハン（代表ヨッフェに代る）と日ソ交渉はじまる。一九二五年一月日ソ基本条約調印。

。「震災救援物資」を積んでレーニン号来航（13日）政府は横浜入港を拒否。

一九二四（大正一三）年

2月。総同盟第一三年大会（10〜12日）で「ロシア承認決議文」可決。

。官業労働総同盟大会（11日）「労農ロシア承認」可決。

。日本農民組合第三回全国大会（29日―3月1日）「労農露国承認の件」可決（『土地と自由』27号―三月二五日）。

3月。全国水平社第三回大会（3日）「労農ロシア即時承認の件」可決、於京都岡崎公会堂（『水平運動史の研究』二巻）。

。総同盟関西同盟会理事会「ロシア承認」スローガン決定。

4月。総同盟神戸連合大会「日露両国労働組合物々交換開始の件」可決（12日）。

5月。第五回メーデー京都、大阪、神戸、名古屋、堺で「労農ロシア承認」スローガン決定。

6月。東京合同労組大会「労農ロシア承認の件促進」について総同盟へ決議文を送ることを決定（15日）。

10月。関東同盟大会「労農ロシア承認の件」可決（5日）。

◎一九二四〜五年には徳田球一らによってモスクワのクートベ（東洋勤労者共産大学）に多くの労働者を派遣していた。当時モスクワには片山潜がおり、その指導にも当っていた。高橋貞樹らもモスクワで研究を積んでいた。

註　奥田修三「大正期労働運動と『労農ロシア』承認運動の展開」（『立命館産業社会論集』第一〇号）、山辺健太郎・竹村英輔「十月革命が日本にあたえた影響」（『前衛』一九五七年一一月号）拙著『ロシア革命とシベリア出兵』により作成した。ことに奥田論文によったところが多い。記して謝意を表する。

井上満・ちとせ記念会より本書刊行援助

井上満・ちとせ記念会より『ロシア革命と佐藤三千夫』刊行のための出版費の一部を援助していただいた。記して深謝の意を表するものである。

井上満は福岡県が生んだすぐれたロシア文学者であり、日ソ友好運動にとってかけがえのない推進者でもあった。一九〇〇年生れの満は、一九五九年五月一四日にその生涯をとじていた。六〇〇冊にのぼる満のロシア文学関係の原書は、日ソ協会福岡県連事務所に井上文庫として保管され活用されている。

なお井上満のロシア文学碑は久留米市の正源寺にあることも付記しておく。

「補遺」へのあとがき

『ロシア革命とシベリア出兵』を公刊したのが四月であったので、すでに半年が経過した。この間、数多くの書評や紹介やご意見をいただくことができたが、この書評・意見の中に、なぜもっと「佐藤三千夫」についてふれないのか、「佐藤三千夫」について一項目を設けてあつかわないのか、という意見は全くなかった。筆者自身にしても『市川正一公判陳述』いわゆる『日本共産党闘争小史』の域をあまり出るものではなかった。うかつではあったが徳永直『日本人サトウ』を手にしたのはすでに『ロシア革命とシベリア出兵』の印刷にかかっていた時期であった。このことは徳永直が〃「日本人サトウ」は、いつ日本海をこえて、故郷宮城県登米町にかえってくるであろうか。〃また〃いつ父親唯助は、「国に迷惑をかけた」と思いこんでいる悴への誤解をとくことができるであろうか〃と設問した問に対して、「日本人サトウ」は日本の民衆の中にかえってきた ― と答えるには余りにも心もとない今日的段階にあるといわねばならない。

『ロシア革命と佐藤三千夫』とするこの「補遺」は、さきの『ロシア革命とシベリア出兵』とあわせてお読みいただき、徳永直が期待をこめて訴えている「いずれ遠からぬ将来に、三千夫は日本の労働者農民の花環にもかざられて、日本海をこえてもどってくるだろう」という念願を是非かなえねばならない歴史的現実にあることを強調したいのである。昨今の大問題であ

る「元号法制化」問題、「君が代国歌化」問題、「有事立法」問題とたたかう日本人民にとっては、この「佐藤三千夫」の復権への努力は歴史研究者にとっての社会的責任の重要な一つではないだろうか。日ソ協会の活動の重要な一事ではないだろうか。

すでに日ソ協会福岡県連合会の事務局長である長浜実雄さんや、副会長山内正樹さん、理事岩倉啓裕・外山一郎さんらは、『ロシア革命とシベリア出兵』が発行される直前の一九七八年三月に、東北で開かれた日ソ協会全国総会参加を機会に、佐藤三千夫の郷里宮城県登米町を訪ねて三千夫の墓に墓参していた。また三千夫に詳しい首藤直一郎さんも訪問して下さっていた。そしてこの秋九月二三～四日に熊本県阿蘇内之牧で開かれた「第一三回全九州日ソ友好学校」で筆者はこの「佐藤三千夫」の活動を中心に報告していた。

なお私はこの八月に一カ月渡米して「ロシア革命とシベリア出兵」についてアメリカの民衆がどのようにとらえていたのかを調査してきた。「佐藤三千夫」についてはソビエトに調査を依頼している。併せて後日ご報告しようと考えている。末筆とはなったが、本書執筆に当ってお世話下さった日ソ協会福岡県連合会事務局長の長浜実雄さんや法政大学大原社会問題研究所の方々に謝辞をのべつつ擱筆することにする。

一九七八年一一月八日

熊本県植木温泉にて

新藤　東洋男

新藤　東洋男（しんどう　とよお）

1932年　山梨県に生る　日本近現代史専攻

日ソ協会福岡県連合会理事
福岡県自治体問題研究所理事
部落問題研究所研究員
歴史科学研究協議会員
歴史教育者協議会員

ロシア革命と佐藤三千夫

頒価　500円

印刷日　一九七九年五月二五日
発行日　一九七九年六月　二　日
編著者　新藤東洋男
発行者　日ソ協会福岡県連合会
福岡市中央区天神町一丁目一番一八号　サンビル
電〇九二―七五一―二七七六
振替　福岡四七〇一

印刷所　増永印刷所
福岡県大牟田市三池新町二八八
電〇九四四―五二―二八七六

取次店　古雅書店
福岡県大牟田市本町一丁目一の十二
電〇九四四―五二―七七三〇
振替福岡一九〇七七